

産学共同でIBD議論

アポプラスプロジェクト開始

アポプラスステーションは、産学共同IBD（炎症性腸疾患）プロジェクトをスタートさせた。IBD診療を担う医師と製薬企業が

患者中心の治療選択について議論する機会を設けるもので、9月には初めての会合を行っている。潰瘍性大腸炎、クローン

病の患者数増加に伴い、多くの新薬が登場し、治療のあり方を学ぶ機会が望まれている。同プロジェクトは、北里大学北里研究所病院炎症性腸疾患先進治療センター長の日比紀文氏と京都大学大学院医学研究科特任教授の福原俊一氏が発起

人となり、立ち上げられた。同社が主催することで、医師と製薬企業が同じ場で全ての薬剤について横断的に議論できるのが特徴で、9月に開催された第1回会合では、首都圏を中心に11施設から医師17人や製薬企業14社からMA、MSLの担当者らが参加。潰瘍性大腸炎の症例検討などを通じて議論が行われ、参加した医師からは「製薬企業のMA、MSLの疾患に対する考え方が伝わった」などの声が上がったという。

また、今後の臨床研究のあり方についての講演も行われた。同社は、今後もIBD診療と患者のQOL向上を目指した取り組みを進

めていく。